

# 時間学公開学術シンポジウム 「映像・映画・身体と、時間」 を開催

ハイライト

- ・時間学公開学術シンポジウム
- ・日本時間学会第 4 回大会
- ・公開講座「時間学への招待」

目次：

公開学術シンポジウム 「映像・映画・身体と、時間」	1
日本時間学会第 4 回大会	2
公開講座「時間学への招待」	2
・広中平祐名誉所長と懇談 ・時間学特別セミナー 「お経に学ぶ時間学」 ・室崎教授の論文が F1000 に選定	3
・「ヘルシスト」に紹介記事 所長室より ・速度と加速度	3
時間学研究所の教育活動	4
今後のお知らせ	4
・時間学アフタヌーン& イブニングセミナー ・時間学国際シンポジウム 時間学ミニ辞典 【同時性の観念】	4

日本時間学会第4回大会（次頁にて紹介）との共催により時間学公開学術シンポジウム「映像・映画・身体と、時間」を開催しました（6月9日、立教大学池袋キャンパス）。さまざまな大学・機関より、約100名の方々にご参加いただき、盛会のうちに終了いたしました。



講演中の風景

立教大学現代心理学部・宇野邦一教授による講演「時間という破局的問い」では、映画や演劇に見られる分節化以前の時間体験の豊かさが、映像作品の上映やドゥルーズらへの言及とともに述べられました。

大阪大学生命機能研究科・中野珠実助教の講演「ヒトが共有する『暗黙のものの見方』：瞬目と視線パターン研究より」では、ヒトの瞬目（まばたき）のタイミ



宇野先生と中野先生

ングの一致が映像体験の分節化に対応することを示すデータが紹介されました。

立教大学現代心理学部・日高聡太准教授の講演「ここで感じる動き」では、映像の実際の順序に対する知覚順序のずれや可逆性などが、分かりやすく解説されました。



日高先生

各演者による講演の後には、本研究所・青山拓央准教授をコーディネーターとしてパネルディスカッションが行なわれ、講演者間での質疑応答に加え、会場の参加者との活発な意見交換、議論も行なわれました。シンポジウムの全体を通じて、芸術的側面と自然科学的側面の両面から映像体験の多様性を知る、文理融合的な幅広い内容となりました。



青山准教授によるパネルディスカッション

時間学研究所ニュースレター第2号をお届けします。今回は時間学公開シンポジウム、日本時間学会第四回大会、公開講座「時間学の招待」の報告を中心にお届けします。

《時間学研究所》  
〒753-8511  
山口市吉田 1677-1  
TEL/FAX083-933-5848  
jikann@yamaguchi-u.ac.jp  
www.rits.yamaguchi-u.ac.jp



# 日本時間学会第4回大会が 開催されました。

日本時間学会第4回大会が、立教大学池袋キャンパスにて6月9、10日の日程で開催されました(実行委員長 石川巧 立教大学教授)。



石川巧先生(左から三番目)、学会長 辻正二先生(中央)、学生スタッフの皆さん

本研究所からは右田裕晃講師、山田祐樹助教が以下のような研究発表を行いました。

- ・ レジャーとしての〈夜食〉の誕生 ―〈夜〉の意味と制度の近代的再編に関わる一考察(右田裕晃)
- ・ 視覚誘導性自己運動は発話速度を加速させる(山田祐樹)



右田講師

また、本研究所客員教授でもある一川誠先生(千葉大学)とその研究室の学生さん達や共同研究者による時間に関する心理学的研究、おなじく本研究所客員教授の織田一朗先生(首都大学東京)による「世界時計に見る地味票準時の変遷」、竹林正三先生(富士常葉大学)による「お経」は時間をどうとらえたか」に関する発表がありました。

2日間にわたって美術、文学、宗教、社会、心理、生命、情報、環境といった多様なフィールドから時間に関する演題が発表され、分野や文理の垣根を越えた議論が展開されました。



総会参加メンバーの集合写真

# 公開講座「時間学への招待」 を開講。

6月23日から7月14日の毎週土曜日に山口大学エクステンションセンター公開講座「時間学への招待」を開講しました(全4回)。その要項は次の通りです。

講座名： 時間学への招待

開催期間： 6月23日～7月14日 毎週土曜日 13:30～15:00

会場： 山口大学吉田キャンパス 人文学部大講義室

対象： 一般市民(62名)

各回のテーマと担当講師：

- ① 6月23日(土) 生物の時間(担当講師：明石真)
- ② 6月30日(土) ところ・脳の時間(担当講師：宮崎真)
- ③ 7月7日(土) 時間と生活の哲学(担当講師：青山石央)
- ④ 7月14日(土) 物理の時間(担当講師：藤沢健太)



講義の様子

本講座では、時間学研究所の教員がそれぞれ専門分野から「時間」をキーワードとしたトピックを講義しました。「生物の時間」では人間を含む生物が様々なリズムや時間を持っていることについて、「ところ・脳の時間」では時間まつわる錯覚現象を紹介しながら我々の脳の仕組みについて、「時間と生活の哲学」では幸福や価値と時間の関係について、「物理の時間」では相対性理論と時間の流れ方の変化についてのお話をしました。

毎回ほとんど欠席者もなく、受講者の皆さんの真剣で熱意ある受講姿勢に、講師一同、大いに発奮されました。受講者の皆様からの質問や発言は講義中だけに留まらず講義終了後30分以上にわたる回もありました。さらには講義期間終了後にお手紙やメールでのご質問もありました。なかには専門家も顔負けの本質的な質問やコメントもあり、驚かされる場面が多々ありました。この講座を通じて、むしろ私達の方が受講者の皆様から刺激を受け、学ばせて頂きました。この場を借りて受講者の皆様に厚く御礼申し上げます。



講義最終日、藤沢教授から受講者一人一人に修了証を授与



## 広中平祐名誉所長と懇談

6月19日、我が国二人目のフィールズ賞受賞者であり本学前学長でもある広中平祐名誉所長と、進士所長と藤沢教授が懇談しました。本研究所のこれまで、そして現在の活動を奨励して頂くとともに、今後200年を見据えた時間学研究の継続を鼓舞して頂きました。



広中平祐名誉所長

## 宮崎教授の論文がF1000 選定

宮崎真教授の論文が「Faculty of 1000<sup>®</sup> Neuroscience」に選定されました（2012年5月31日付）。バイズモデルを脳の時間情報処理に適用した革新性が評価されています。

<http://f1000.com/715947812>

\* Faculty of 1000 (F1000) とは、日々出版される膨大な論文から特に注目すべきもの（約0.2%）を厳選して公表し、研究者が読みたい論文を捜す際の一つの指標となっています。選考員から重要論文としての推薦を受け、編集者が精査の上でその重要性を確認した場合に Faculty of 1000 に掲載されます。F1000の選考員はノーベル賞受賞者、ラスカー賞受賞者、Royal Society フェロー、NAS メンバーなど含むトップ研究者から構成されています。

明石真教授の論文も2005年に「Faculty of 1000 Biology」に選定されていますので、併せて紹介いたします。

<http://f1000.com/1025372>

## 時間学特別セミナー 「お経に学ぶ時間学」を開催

7月17日に山口大学吉田キャンパス総合研究棟3Fフォーラムスペースに本研究所客員教授の竹林征三先生を講師にお迎えして時間学特別セミナー「お経に学ぶ時間学」を開催しました。お経を軸に“Nature”と“自然”の違いといった西洋と東洋の知の在り方の違いを読み解き、これからの時間学の目指すべき方向を論じられました。



竹林征三先生

## ヘルシスト9月号で紹介

株式会社ヤクルト本社が発行する健康科学情報誌「ヘルシスト」の9月号に時間学研究所の紹介記事が掲載されます。研究所の沿革やこれからの研究方針とともに明石教授の時間生物学と時間医療、青山准教授の哲学的幸福論、右田講師の夜食の文化誌の研究が紹介されます。



取材を受ける進士所長

## 所長室より

### 速度と加速度

土木工学の研究者としては時間学研究所所長になるまでしっかりと考えていなかった問題の一つが速度と加速度です。一般に、速度とは単位時間に移動する距離と定義されます。そうすると、加速度とは単位時間に変化する速度の変化率ということになります。しかし、加速度は体で感じることはできませんが、どれだけ速度で自分が移動しているのか、一定速度で公転、自転する地球上では、走るバスに乗り合わせた人同士がバスの中でキャッチボールしているようなものでほとんど感じることはできません。一方、光の速度は約30万km/secで測定位置に依存せず一定です。ということは、見る側の速度との違いにより、時間そのものが伸びたり縮んだりしないと一定にならないことを意味しています。速度、加速度とも一定時間における変化量ですので、正確にそれらを計測するには時間も正確に計測する必要があります。現在、時間はセシウム原子に基づく原子時計を使って1秒を定義していますが、人間の生活は地球の自転に沿って行われており、しかも潮汐の影響などもあって地球の自転にばらつきが生じます。そこで、うるう秒として、本年7月1日午前8時59分60秒を挿入し調整が行われました。それくらい精度の高い原子時計ですが、現在地球の上空20,000kmにはこの原子時計を搭載した人工衛星がGPSとして周回し、われわれの場所や時間を正確に知ることに役立っています。

しかし、GPS衛星は3.874km/secの速度で地球を周回しているので、地表より時間の進み方がゆっくりになります。実際に、このGPS衛星に搭載された原子時計は地上の原子時計と一致させるため、毎秒100億分の4.45秒だけ遅く進むように補正されています。

このように、これまで一定で変化がないと考えていたものが、実は、見方によりさまざまに変化していること、身の回りのなにげない変化を丁寧に観察することが現代社会を楽しく生き抜くための時間学の発展に繋がるかもしれません。秋から冬にかけてさまざまなセミナーが研究所主催で開催されます。身近なセミナーに参加いただき、違った目でこれまでの世界を丁寧に観察するという経験をさせてはどうでしょうか？お待ちしております。（進士正人）

## 時間学研究所の教育活動紹介

時間学研究所は研究だけでなく、その知見を山口大学の学部生、大学院生に伝えていくための教育活動も行っております。第一回目の本号では時間学研究所の専任教員達の今年度の担当講義を紹介致します。

- ・藤沢教授  
宇宙と人間（共通教育1年）  
ロジカルシンキングⅠ（理学部 物理・情報科学科1年）  
宇宙物理学（理学部 物理・情報科学科3、4年）  
物理学実験Ⅱ（理学部 物理・情報科学科3、4年・分担）  
電波天文学特論（理工学研究科）  
修士課程・博士課程研究指導
- ・明石教授  
こころとその座（医学系共通教育・分担）  
生物学演習Ⅰ（理学部 生物・化学科2年）  
時間生物学（理学部 生物・化学科3年）  
時間生物学特論（理工学研究科・修士課程）  
環境共生学原論Ⅱ（理工学研究科・修士課程）  
環境共生生物科学特論（理工学研究科・修士課程）  
生物時計学特論（理工学研究科・博士課程）  
修士課程・博士課程研究指導
- ・青山准教授  
西洋哲学特講義（人文学部2～4年）  
西洋哲学演習（人文学部2～4年）  
西洋哲学思想論Ⅱ（人文学部・修士課程）  
哲学（共通教育1～4年）
- ・専任教員全員分担  
前期「時間学B」  
後期「時間学A」

◎次号からは各講義について概要と特色を紹介していきます！

## 今後のお知らせ

### 時間学アフタヌーン&イブニング セミナー

10月28日に東京でアフタヌーンセミナー、12月2日に福岡でイブニングセミナーを開催します。

#### ◇アフタヌーンセミナー2012 in 東京

テーマ：睡眠障害とメタボリックシンドローム

日時：平成24年10月28日（日）13:00～16:00

会場：「スクワール麹町」 <http://www.square.or.jp/index.php>

講演者： 内山 真 先生（日本大学医学部）

野田 光彦 先生（国立国際医療研究センター）

平野 均 先生（山口大学保健管理センター）

#### ◇イブニングセミナー2012 in 福岡

テーマ：時間医療

日時：平成24年12月2日（日）

会場：「NHK 福岡放送局よかビジョンホール」

<http://www.nhk.or.jp/fukuoka/map/index.html>

講演者： 明石 真 先生（山口大学時間学研究所）

市川 衛 先生（NHK 福岡放送局ディレクター）

大戸 茂弘 先生（九州大学薬学部）

### 時間学国際シンポジウム

本年度は12月8日（土）にカリフォルニア工科大の下條謙輔先生とブラッドフォード大のJames Heron 先生をお招きして「脳と時間」というタイトルで時間学国際シンポジウムを開催します。現時点での開催予定は次の通りとなります。

タイトル：「脳と時間—時間—によって解明される意識と知覚」

日時：12月8日（土）14:30～18:00（予定）

場所：山口大学吉田キャンパス 大学会館

講演者：下條謙輔先生（カリフォルニア工科大学・米国）

James Heron 先生（ブラッドフォード大学・英国）

指定討論者：一川誠先生（千葉大学）、青山拓史先生（時間学研究所）

※セミナー・シンポジウムともに入場無料、事前登録の必要なし

### 時間学ミニ辞典

#### 【同時性の観念】

〈バネディクト・アンダーソン『想像の共同体』（1983年）の鍵概念の一つである。近代が生み出した一つの想像様式としてネイションを構成主義的に再定義する中で、同書は次のような時間論をくりひろげる。近代世界における〈国民〉ないし〈国民国家〉の誕生には、時間意識とりわけ〈同時性の観念〉の変容が密接にかかわりあっている。すなわちナショナリズムの時代に生きる近現代人の〈同時性の観念〉には旧世界のそれとの決定的な断絶がみとめられる。〈現在〉の裡に〈過去〉や〈未来〉がないまぜとなって現前し感覚される宗教的で垂直的な〈同時性の観念〉とも、顔見知り同士からなる狭小な共同体で感受される〈同時性の観念〉とも、それは全く異質なものである。たとえば現代の「ひとりのアメリカ人は、二億四千万余のアメリカ人同胞のうち、ほんの一握りの人以外、一生のうちで会うことも、名前を知ることもない」。なのに「彼は、〔他の〕アメリカ人のゆるぎない、匿名の、同時的な活動についてまったく確信している」。——国土のどこかで自分と同じ〈現在〉を生きる他者について想像・確信しうること。同書によると、19世紀からのネイションの林立を基礎づけたのはこの国家横断的な〈同時性の観念〉の社会的滲透なのである。（右田裕規）